



町民文芸

只見短歌会

一月詠草

大塚栄一 指導

花活けし時の水滴拭くこともせず忙しく除夜の鐘聞く

齊藤ちひろ

吉津 政枝

大関を射止め名乗りし日馬富士日々応援し勝越し見るも

古川 英子

四台中古車乗りつぎ勤め来し夫健やかに金婚迎ふ

馬場 八智

穏やかな寒入りなれど凄まじき雷響き我はたどろぐ

五十嵐英子

妹の家に五日も泊りつつ夜遅くまで話は弾む

渡部ゆき子

過疎となり出荷も出来ずや会津路に赤き柿の実雪を被れり

目黒 富子

家内の貯蔵に合はぬ温もりか野菜の鮮度徐々に失せゆく

皆川 恒子

置表の如く縁もつごぎを敷き雪まつりに来る遠き孫待つ

五十嵐夏美

配達的最中に雨の降り出でて懐深く新聞抱く

渡部ヨリ子

亡き母に似てきたること言ふ人の思ひ出聞きつつ遠き日偲ぶ

新国洋子

久びさに泊りし姉はこぶし苑の看護師ら褒め話は尽きず

(出詠順)

只見俳句会

二月例会

目黒十一 指導

牡丹なべ湯気を見つめて箸迷う
校内にマーチが響く春立つ日

隆 堂

手づくりの味噌の大桶注連飾る
鏡割り焼いて下校の子を待てり

邦 夫

よく笑う少女四五人雪晴れ間
寒卵割れば二つの黄身生まる

康 女

日の射して塵美しき喪正月
初日待つ一湾に沿う車の灯

笑 羊

年の瀬に炊き出しをするボランティア
賀客待つ炉の鉄瓶の湯のたぎり

リウコ

この世いま全て静かに年明けける
綿入れの匂いやここに母の有り

都

夜啼や寒飴煮つむ囲炉裏端
大小の冬芽の覗く庭木かな

一 穂

氷点の前後や水の面揺らぐ
八代目挨拶状の冬茶碗

洋 子

女正月障子に響く笑い声
歯固めの栗の甘さや母の味

敦 子

冬温しのけておきたし温暖化
泣き声と笑う声湧き親子スキ

郁 子

降る雪やここ大正の糸取り場
胼の平の女はつよし絹つむぐ

礼

冬いちご香り流るる仏の間
成木責姉と二人の夢の中

邦 男

大鷲の狙いひっそり寒の池
いつとなく手編みセーター脱ぐ日和

一 灯

どんどの火昭和の貌を照らしけり
猟銃音空にいつとき止どまりて

恒 夫

初日記去年のことも二行ほど
初山入祠に神のいますごと

又壺歩

迫りくる安芸の宮島冬風げり
待ち前に老練配し熊狩れり

吉 児